



2011年4月2日(土) 札幌市エル
プラザに於いて「第7回 総会」が
行われました。

2011年度からの事業変更や小麦
トラストの終了案に、参加者から
は様々な質問や意見が出ました。



2011年5月7日(土) 江別市 萩原
さんの農場にて。

小麦トラストの企画「畑へ種まき
に行こう」で300坪の圃場にはる
きらりの種をまきました。小さな
子どもたちも一生懸命種をまいて
いました。

発行

NPO
法人 北海道食の自給ネットワーク
札幌市東区北15条東18丁目2-17 (有)ワードエム内
TEL (090) 2818-5502 FAX (011) 789-8890

ホームページアドレス
<http://jikyuu.net>
E-mail: info@jikyuu.net

私たちと原発は、やはり共存できない

新聞記者、子どもたちの未来を創る会 事務局長 安川 誠二

地域の崩壊をもたらす原発

3月11日、東日本大震災とそれに伴う東電福島第一原発の事故が起きた。過去最大級の震災によって多くの人命が失われ、未曾有の大被害を受けた。しかし地震発生から4カ月が過ぎ、被災地からは復興の槌音も聞こえてきた。

一方、原発事故のあった「フクシマ」はどうか。警戒区域の20キロ圏内には立ち入りができず、有機農業などでも知られる飯館村は計画的避難区域に指定され、人口6000人の住民のうち9割以上が既に村外に避難している。放射能汚染のために、地道に創り上げてきた地域社会が崩壊してしまったのだ。

首都圏への電力供給のために福島の人たちが犠牲になった。それはとりもなおさず、泊原発周辺自治体と札幌との関係と重なる。泊で万が一のことがあったら、あの積丹半島の美しい海と山に囲まれ、自然豊かな地域に暮らす多くの人たちが札幌圏への送電のために放射能に汚染されてしまう。泊原発から東に80キロしか離れてない札幌にも影響が出るのは間違いない。

ひとたび原発で重大事故が起きたら、周辺住民は生活の場所を失い地域社会が崩壊し、基幹産業である農林漁業も壊滅的な被害を受けることが明らかになった。しかも福島原発は未だに収束のめどが立っていない。今の科学技術では、事故を起こした原発を制御できないことも白日の下にさらしたのだ。

北海道で泊原発が稼働している限り、私たち道民は「フクシマ」と同様の危険と隣り合わせの生活を送っていかなければならないことも、改めて思い知らされた。

泊は大丈夫なのか

地球はいま地殻変動の活動期を迎えていると言う。2004年のスマトラ沖地震、2008年の四川大地震、2010年1月のハイチ地震、同年2月のチリ地震、そして今年に入ってニュージーランド地震が起き、3月11日を迎えた。頻発する地震を見れば、専門家が環太平洋を囲むプレート上で地殻の動きが活発になっていると、分析しても不思議ではない。

東洋大学の渡辺満久教授は2009年、「泊原発の15キロほど沖にこれまで確認されていない活断層がある」と指摘した。長さが70キロにも及ぶ海底活断層といい、これがずれればM7.5級の地震が起きると予測する。これに対し北電は「耐震安全性に問題ない」との調査結果を経産省に提出している。

しかしこの断層に加え、日本の海岸線にある陸地はほんの数千年前の縄文時代には海水に浸かっており、不安定で地すべりを起こしやすい軟弱な土地だと、広瀬隆さんが著書『原子炉時限爆弾』で述べている。

地質学者の生越忠さんも「原発ほど弱い地盤の上に立っているものはない」と指摘する。その生越さんは、泊原発の背後の山岳部と平野部に2つの断層があり、これらが動くとM6.9級の地震が起きると見る。活動期を迎えた中で、まさにいつ大地震がやってもおかしくない状況だ。

さらに泊原発は1989年からの稼働以来、温排水を海に流し続けてきた。原発から4キロ離れた岩内港で海水の温度を30年以上にわたって毎日測定してきた岩内原発問題研究会の斉藤武一代表の調査では、高い時で0.9度上昇し、平均しても0.3度上がった。この結果、スケトウダラやアワビがとれなくなったといい、魚介類への影響が既に出ている。

原発は水蒸気でタービンを回して発電しているが、電気となる熱は3分の1だけで、残りの熱はすべてこの温排水として海に捨てられる。つまり3分の2もの熱を海に放出しなければならない非効率な発電装置が原発だ。大量の温排水で海水を温め続けて、どうして「温暖化防止に役立つ」といえるのだろうか。

周辺海水への影響ばかりではない。稼働して20年を経た1号、2号機の使用済み核燃料は増え続け、貯蔵プールの占有率は35%に達した。稼働を続ければこのプールはいずれ満杯になる。核のゴミをどうするのか、この問題は未解決のままで深刻だ。

北電は原発堅持崩さず

地震や津波などの自然災害と私たち人間は、うまく付き合っていくほかはない。日本は地震多発国だけでなく、台風の通り道でもあり洪水や河川氾濫もたびたび起きる。昔から日本人は甚大な自然災害を「天災」と呼んできた。これからも時として私たちの想像を超える災害があるだろう。それらを甘んじて受け、耐えて、立ち上がって自然とともに暮らしてきたのが日本人なのだ。

でも原発は違う。人の手によって作り出されたものだ。だから人の意思によって止めることができる。今回の原発事故も、大きな自然の力に人間の力が及ばなかった表れではないか。

日本のエネルギーの3割を占めるといわれる原子力発電を減らし、自然エネルギーに変えていく政策を進めるよう、強く国や道に訴えていく。北電にも働きかけていく。これは道民のだれでもがやろうと思えばすぐにはできることだ。

そして私たちは安全に暮らしていけるエネルギーを手に入れるために、あらゆる手段を使って行動していかなければならないと思う。例えば電力会社の株主になる

のも一つの方法だ。原発を止めるための議案を株主総会で提案できるからだ。私も昨年秋に北電株を購入した。泊3号機でプルサーマル発電計画が本格化した時で、100株を約15万円で買った。

北電では原発に反対する3万株が集まれば株主提案ができるが、脱原発派の株主はごく少数だ。6月29日に北電の株主総会が札幌市内で開かれたが、経営陣は原発堅持の姿勢を崩さず、「安全性を高めていく」という決まり文句を述べるだけだった。さらに北電は原発事故後の5月、MOX燃料の製造に向けた申請を国に行った。原発の安全性が揺らぐ中、ウランよりも扱いにくく毒性の高いプルトニウムを使った発電にも着手しようというのだ。

命あつての電力

そんな北電に対し札幌の弁護士は泊原発の運転差し止めを求める裁判を始めようと動き出している。また市民の手による風力発電事業が北海道から始まり、風力による再生可能な自然エネルギーへの取り組みも全国に広がっている。

北海道の基幹産業は農業をはじめとする一次産業であり、美しい景観が魅力の観光業ということは言うまでもない。そのどちらもが自然という恵みから与えられたものだ。私たちが暮らしていくためには電気は必要だが、それ以上に生きていくためにはきれいな水と土と空気が必要不可欠だ。命あつての電力のはず。私たちの命と暮らしを脅かし、基幹産業を足元から崩しかねない電力を、これからも選択していくという余地はない。

全54基の原発で現在本格稼働しているのは17基だけで、このうち5基がまもなく定期検査に入る。電力の3割といわれる原発だが、「実際は2割近くまで落ち込んでいる」と環境エネルギー研究所の飯田哲也代表は見ている。天然ガスによる火力発電などで不足分を補い、風力、太陽光、小水力、地熱などの自然エネルギーへ大きく転換していけば、原発に頼らなくても十分な電気をまかなえる。あとは、国と電力会社が判断するかにかかっている。

「フクシマ」の事故を受け、ドイツは2022年までに国内原発17基すべての停止を閣議決定し、イタリアでも6月の国民投票で脱原発を選択した。私たち人間と原発とは共存できないということが、「フクシマ」の現実で明らかになった今こそ、道民も原発から卒業する「卒原発」へ向かう時だ。

■プロフィール

安川 誠二（やすかわ せいじ）

1961年東京生まれ、札幌在住。北海道新聞記者などを経て、現在、農業専門紙記者、札幌消費者協会理事。東日本大震災後の4月末、将来を担う子どもたちの目線で世の中を考える「子どもたちの未来を創る会」を友人と2人で設立、6月に札幌市内でフォーラム「原子力はほんとうに理想のエネルギーか」を開いた。



食の思い出 季節の話題

のつれづれ日記



「気持ち」という名の調味料

札幌市中央区 橋本 みづほ

小さい頃から調理の世界に憧れがあった私は、一度料理人としての道に入りましたが、沢山の食材に触れていくうちに次第にその食材の栄養や身体に与える影響などに興味を持つようになり、また以前から「食育」にも興味があったため、25才の時、思い切って栄養短大に入学することを決意しました。短大に入った当初は知識も無く、マニュアルにある「食育」を子どもたちに押し付けていたような気がします。

今、食育を強く伝えるのだとしたら、それはまず私たち大人が学ぶべきだと思います。いまの私たちの環境はとても豊かです。しかし、それが文化の方向を変えてしまったようにも思えます。食べたい時に食べたいものを食べられる。でもそれは、いつ何を食べていいのか分からないのと一緒です。小さな子どもほど食べることも選ぶことも出来ません。私たち大人がしっかりと学び、子どもたちの身体と心を豊かに成長できるよう促していくことが大切なことだと私は考えています。

小さい頃、料理のドラマやアニメをみて「料理は愛情だ」なんていうフレーズをバカにしていたのですが、今では正にその通りだと実感しています。最初は飲食店でお客様に料理を提供していましたが、今は保育園に勤め、子どもたちの給食を作っています。保育園では大きな鍋を前に、仕上げの瞬間「美味しくな一れ！」とおまじないをかけるんです。美味しく楽しく食べてもらいたいという気持ちこそが「愛情」の込められた料理へと変わり、美味しさに繋がるのです。その甲斐あってか、私は今に至るまで包丁を握り続け食事をする人の喜ぶ顔や楽しそうな顔を沢山いただくことができました。そしてその笑顔は、また人を幸せにしてくれるのです。

忙しい人や一人の時間が多い人が増えています。食事は作るのではなく買う時代になろうとしています。誰が何処で作り何を使ったかわからない料理は、元気な身体を作ってくれないと同時に人の心も乏しくします。料理は下手でも、まずくてもいいのです。気持ちを込めておにぎり1つ握るだけでも素晴らしいご馳走へと変身します。皆さん、わずかでもかまいません。時間と気持ちをそこに費やしてみてください。そのわずかな時間は人の心を豊かにしてくれるはず。料理とは、気持ち一つで味が変わります。私はこれからも食べることの大切さ、楽しさ、喜びをできるだけ多くの人に伝えて行きたいと強く思います。

「東日本大震災」安平町からの報告

安平町 内藤牧場 内藤 圭子(あながす牛一貫生産農家)

3月11日の震災から120日が過ぎました。50年生きてきてこんなに大きな災害を目の当たりにしたことが無かったので、自分には何ができるんだろう？と思うばかり。周りで精力的に支援活動に動く友人知人を、すごいな～となぜか別世界の様な気持で見ている自分がいました。

4月の始め、長沼にある農場「メノビレッジ」のレイモンド・エップさんの紹介で、飯館村で肉牛を飼っているKさんご夫妻が牧場を見学に見えました。それでぐつと自分にとって震災が現実的な話になりました。目の前に被災者の方がいる。私に何ができますか？それしか言えなかった自分に自己嫌悪。その後千歳市でKさん夫妻を囲む会があり参加しました。そこで、田舎の閉ざされた社会の中で自分だけ何かすることのやりにくさ、情報が捻じ曲げられて報道される事のむなしさなど私たちには知り得ない事を聞き、地震によって様々なことが連鎖的に起こって村自体が壊れかねない恐ろしさを感じました。結局、飯館村は放射能の影響で計画的避難区域になってしまいました。のどかな田舎の役場がこの大惨事に対応しきれないもどかしさ、情報の無い不安、こんなに離れていたのにまさか原発の影響が来るとは思ってもみなかった事など、原発の事故に翻弄されていく様子に言葉もありません。Kさんは地元の18代目の農家だそうで、北海道では考えられない歴史を感じ、その土地を離れなくてはならない苦悩を思いました。もし私が彼らと同じ立場になったら、安平町を離れることの無念さは言葉では言い表すことはできません。いいえ、きっと離れることはできません。どう考えても無理です。私たちが結婚して築いてきたこの牧場、24年間暮らしてきたこの美しい森や牛と離れることはできません。原発の被災地では農民の思いと関係なく牛を手放し土地を離れることを強いられているのです。

現在Kさん夫妻は茨城の奥様の実家に避難していて、呼ばれると原発の話をしにあちこち出かけています。Kさん夫妻とつながることで自分にも何か支援ができるのでは？という思いが、Kさんの話を聞いた人たちの間に広がっています。「飯館村は残りたいと言うわずかな人を残し、ほとんどの方が避難をしました。セリで売って牛もほとんどいなくなりました。いつ戻ることができるのか全く分かりません。村ではなぜ早く非難をしないんだ？という人とそんなに簡単に村を離れられないと言う人の思いがあり、原発事故が無ければ起こることも無かった悲しい対立がありました。大学の先生や専門家の人が大勢来て、安全ですと言う人も

いるし、すぐ逃げなさいと言う人もいる。どの情報を信じていいのか、本当の事がわからない不安に事故以来さらされてきました。今1次避難が終わり、今後仮説住宅が完成すると2次避難の開始です。村の近くに住みたい人、できるだけ離れた人など様々なニーズに対応しなくてはなりません。」とKさんが話してくれました。

私の住んでいる安平町は自衛隊の町なので隊員が被災地に支援に行っています。町として東北とつながりが無いので、地元の企業とつながりのある宮城県山元町に支援に行きました。安平町では「耕せニッポン」の方々が活動しているので、そのつながりで避難してきた方もいます。町では定住希望の方には支援したいと言っていたのですが、地元の仕事が無いので今の所被災証明を持って移住してきた人はいません。

そんな状況を受けメノビレッジのレイモンドさんは、今長沼町で農地トラストを計画しています。被災者が農業をすることができるように土地を準備して、使用料を払ってもらいそこで農業をしてもらう。今回の震災で多くの農地が流され作付できない畑や田んぼが2万haもあるそうです。放射能の影響で使えない畑や田んぼも合わせると相当な面積です。日本の食糧が足りなくならないように作れるところではしっかり食糧を生産できる形を作る必要がありますし、また被災者の農民が新しい土地で農業を再開できたら今まで培った技術を生かすことができます。メノビレッジではこれに大豆やひまわり、なたねの搾油事業を合わせて雇用を生み出すことを考えています。輪作体系にこれらの作物を組み合わせ、搾油によってできた油をバイオディーゼルや灯油、せっけん、食用に使い油粕は肥料や飼料にします。今年アメリカに買いに行った搾油機が大活躍しそうです。

これからの農業のスタイルの一つとして土地を持つのではなくシェアするという考え方が生まれてきました。茨城からKさんが来て、この農地トラストの土地で農業をするそうです。「すべてを失ってみてこれから先の生き方を考えた時に、土地を大切に使うって次の世代に渡すと言うこの新しい農業のスタイルに希望を見えています」とKさんは語ってくれました。

先行きのわからない不安はとうとう自殺者も出してしまいました。今私にできることは被災者の方々の声に寄り添い思いを共にすることではないかと思っています。これから長い支援が必要なはずです。いつも心はそちらに向いています。必要な時には手を差し伸べられるように、自分の仕事をきちんとこなして、その時に備えて準備をしたいと思います。最近しみじみ感じるのですが、震災前と後では幸せの尺度が変わってきています。北海道の初夏の森は本当に美しいです。そこに暮らすことができる幸せをしみじみ感じ、普通の日々を送ることができることに感謝して暮らしています。



大豆プロジェクト報告

大豆プロジェクトリーダー 五十嵐 美由紀

春先の天候不順により大豆の播種が出来るのかと大変心配しましたが、5月中旬には播種を終え、12年目を迎える「作り支え・食べ支え」運動をスタートさせることが出来ました。12年間の大豆トラストを振り返ると長雨、干ばつ、雹、台風と天候異変に見舞われながら「今年は皆さんに美味しいツルムスメをお届けできるのか…」と気の休まる年はありませんでした。

6月18日岩見沢市北村の生産者・山崎さんの大豆畑を訪ね、本葉2葉になった大豆を見てホッとしました。山崎さんのご家族にも大豆トラストの目的をお話して運動への理解と協力をお願いし、畑を後にしました。

今年度も加工業者さん、道産食材を使っている飲食店、食や農に関心があり実際に活動している人たちと連携しながら「作り支え・食べ支え」運動の輪を広げていきたいと思っています。



小麦プロジェクト報告

最後の小麦トラストと小麦作りに挑戦です。

事務局 養島 礼子

2002年にスタートした小麦トラストは今年10年目を迎えました。そして小麦トラスト事業は今年度をもって終了となります。これまで延べ1300人を超す参加者と共に、小麦をとおして「作り支える生産者と食べ支える消費者」の双方の顔が見える関係を築き、今日まで運動を継続できたことに感謝しています。

最後のトラストを実施するにあたり、昨年度の参加者のほか2005年～2009年に参加された皆さんにもトラストご案内を送付しました。申込者からは終了を惜しむ声や「多少高くても道産品を買っています」という嬉しいメッセージも頂きました。自給ネットワークが目指したトラスト運動の種子は着実に皆さんの行動の中で育ち広がっている事を実感しました。12月からは最後のトラスト製品詰め合わせを皆さんの許へお届けします。記念すべき最終年度の機に自給ネット会員の皆さんのご参加を願っています。

さて、今年は恒例の生産地見学交流ツアー及びパン作り講習会を中止し、トラスト生産者の小麦畑とは別に畑をお借りして、参加者と一緒に小麦を作ります。場所は江別の生産者萩原英樹さんの農場の一角で広さは300坪です。新品種の「はるきらり」を



7月2日 実っています！

手蒔きして、8月中旬に刈取り。製粉した粉でパンやパスタを作りトラスト参加者の皆さんと一緒に「収穫パーティー」を企画しています。天候不順が続いた5月7日(土)「畑に種まきに行こう!」を実施しました。萩原さんの指導のもと、20名の参加者と種まきを実施しました。小麦は収穫適期の降雨による穂発芽が気になります。参加者と刈取りが無事に出来ますようにと念じるばかりです。結果は次の会報でお伝えします。



食育プロジェクト活動報告

食育プロジェクトスタッフ 長谷部 直美

6月18日、札幌市エルプラザにて「まるごと学ぼう!! 食育講座2011」第一回講座が開催されました。昨年から連携している藤女子大の学生さんも加わり、この日のスタッフは21人、受講生21人(運動会のため3人欠席)。また午後の講師であるエゾロックのお二人も早朝から手伝ってくれて会場は熱気で一杯でした。講座は、北海道食材の名前が付いた6つの班に分かれ、班の仲間と協力しておこなっていきます。

本物の小学校の先生でもある担任役の本間先生の下、元気な挨拶からスタート!今年のテーマは「ためして・なっとく!!本物の味」。第一回目の講師はフードプロデューサーでありスタッフの青山則靖さん。「基本はここから!!本物のだし」と題し、まずはカツオ節と昆布で「だし」をとるところから。それをベースに作った「本物」VS「市販のだし・めんつゆ・だし入りみそ」をそれぞれ丁寧に味比べしていきました。辺りに「だし」の良い香りが漂う中、子供たちからは「うす〜い」「味しな〜い」の声。やはり、食べ慣れた化学調味料入りの濃い味を美味しいと感じる傾向があるようでした。献立は・ご飯・大根とあげの味噌汁・野菜と豚肉の卵とじ・佃煮。お米の炊き方、包丁の使い方、野菜の色々な切り方など青山さんの説明を見て聞いて納得した子どもたちが、いよいよ班に戻って実践。

そして「いただきます!」「美味ー!」「なんでこんなに美味しいの?」と子どもたちの声・声。素材の味を壊さず活かすための本物のだし。先に青山さんが教えてくれたことを思い出すよう促すと、納得した様子の子供たち。わかっているはずの私達でさえ、改めて実感するくらい美味しかったのです。だしがらの昆布と大根の皮を利用して作った佃煮からも、この一手間で廃棄を減らせ美味しく有効活用できるすべを伝えました。

午後はまず、環境NGO「エゾロック」のお二人に環境に優しい食器の洗いを教えて頂きながら後片づけ。さらに「食品ロス」についてのお話。色々なパフォーマンスを駆使し、わかりやすく説明して下さいました。お腹も一杯になり眠気と疲れが襲ってくるはずの午後も、積極的に質問が飛び交う活気ある時間となりました。

学習会「TPPとこれからの農業」に参加して

理事 泉屋 めぐみ

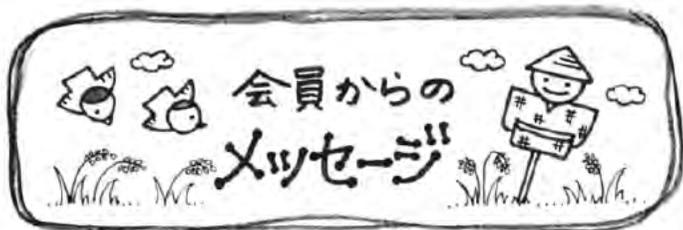
FTAやEPAなどについても学習会をしましたが、さらにTPPとは？中身については詳しくはわからないけれど、日本の食料自給率をさらに引き下げる、ひいては北海道農業を壊滅的に破壊するようだとの懸念から反対の署名なども行ってきました。その直感的な判断に間違いはないと信じていますが、やはりもっと詳しく知ることでもわりの人にも強力に反対署名のお願いが出来るのではないかと思い、会場に足を運びました。講師は北海道大学農学部の上山寛先生。

TPPは「環太平洋パートナーシップ(Trans-Pacific Partnership)協定」のことで、まず2006年にシンガポール、ブルネイ、ニュージーランド、チリの4カ国で「P4協定」が結ばれ、現在の拡大TPPは2010年になってアメリカ、オーストラリア、ペルー、ベトナム、やや遅れてマレーシアが参加した9カ国によるもので、これに日本が加わるかどうかが問われている。P4協定の特徴は、「ハイレベル」「包括的」「戦略的」の3点に要約される。

「ハイレベル」とは、物品の貿易は例外(除外)品目がなく、すべての関税を撤廃す協定。TPPはFTA(自由貿易協定-Free Trade Agreement)の一種であるが、FTAでは10%の例外(除外)品目が認められるが、TPPは「例外なき関税撤廃」である。現在のTPP参加国は「世界最強の農産物輸出国の集まり」(アメリカー穀物、豪州ー食肉、NZー乳製品)となっており、そこに「例外なき関税撤廃」を認める形で参加することは無謀としか言いようがない。

「包括的」とは、物品の貿易や通常の経済連携協定(EPA, Economic Partnership Agreement)に盛り込まれる投資・協力のみならず、サービス貿易、政府調達、人の移動等を含む広い分野に渡る協定である。たとえば、サービス貿易はサービス業者自らが他国に進出して営業することなので、「人の移動」の自由化と「資本の移動」の自由化が条件となるが、それと同時に、日本に進出してきた外国企業が日本で対等な競争条件を確保するためにあらゆる「規制改革」が要求されることになる(これまでの典型は保険市場の開放による外資の参入と「郵政民営化」)。日本医師会は日本がTPPに参入することで、「国民皆保険制度」の崩壊に繋がるものと警告している。アメリカとの関係では、かねてからの「懸案事項」である牛肉の輸入制限の緩和、食品添加物の無制限の拡大、GM(遺伝子組み換え)作物の表示問題などの「非関税障壁」分野でも切り込んで来るはずである。食の安全と医療の両面で国民の生命を危険にさらすのがTPPである。

他にも輸入農産物による国内農産物への影響の試算や、北海道農業に与える影響の試算なども詳しく数字を挙げて教えてくださいましたが、どう考えても誰にとっても良い協定には思えませんでした。TPPに参加することにより農業分野のみならず、あらゆる分野を市場経済原理の中に巻き込み、消費者の選択の自由を奪う方向に進むしか無くなる不安を拭い去ることが出来ません。確信を持ってまわりにも反対署名などを呼びかけていきます。



「食の自給ネットワーク応援団」

旭川市 加藤 真澄

道新の家庭欄に見つけた“自給”の文字にひかれ入会しましたのは、いつだったのか忘れてしまいました。お豆さんの草取りに行ってみたいと思いながら、日常に流され一度も出掛けられなかった自分を責めて過ごして来ました。孫もいていい年齢になりましたが、子育ての頃は日々の食生活の大切さも意識せず、今になって毎日の食生活が大きく影響しているものだと、つくづく感じています。生活習慣病とはよく言ったものです。自然の物や無農薬・減農薬の食材を求めますが個人では限界があるし、只そのまま受け入れるしかない“消費者”と諦め的心境もあります。

私の住んでいる所も元は田んぼ。農地がなくなり休耕地もあちこちに散見。一次産業の担い手は減り、日本の農業や漁業もどうなるのだろうと心配です。あれやこれや思うばかりで日常をかけ抜けております。参加することに意義あり！のスポーツではありませんが、北海道の農業や自給ネットワークが元気に続くようお願い、少しずつでも食べ続けて行こうと思っています。

「当たり前への一步」

札幌市清田区 室矢 弥生

もともと好き嫌いは少ない方でしたし、新しい味に出会うのも楽しみの一つだったので、自分の食生活に対して何の疑問も持たずにいました。生まれてきたその子は、母乳しか口にしていないにもかかわらず、飲むたびに顔は真っ赤に腫れ、体中をかきむしり、いつもぐずぐずと泣いてばかりでした。私の食べたものが母乳になるわけですから無選別でこだわりのない食べ物に反応しているのは確かでした。自分の食べるものに責任があることを感じ始めたとき、古くからの友人に言われた一言が心に響きました。「野菜や果物は産地をしっかりと確認してから買わなくちゃね。」彼女は子供を持ってから学んだのか、ずっと一緒に過ごしてきたあの頃にはそんなそぶりは見せてもいなかったわけですから、なんだかおいていかれた気分になりました。改めて見回すと、スーパーに並ぶ同じ食品でも安価なもの、高価なもの、あらゆる産地があることなど新しい発見がたくさんあると同時に、今まで私がどんなに無責任に買い物をしていたのかに気づかされ、自分の中で基準を決めて丁寧に見比べ選ぶようになりました。こうしてやっと当たり前みんながやっていることになんとかたどり着き、ゆっくりと一步一步進んでいる時に会ったのが、事務局長の大熊さんでした。この団体への加入のきっかけを作ってください大変感謝しております。

☆事務局から 2011年度会費納入のお願い☆

7月15日現在未納の方に振込用紙を同封しました。行違いの折はお許し下さい。

個人会費 2,000円

振込先 郵便振替 02700-1-47533

郵便 ATM 記号027001 番号47533

北洋銀行桑園支店 普通口座 0054918

口座名 北海道食の自給ネットワーク

～あなたもトラストに参加しませんか？～

自給ネットワークでは大豆と小麦の2つのトラスト運動を行っています。「生産者と消費者相互の顔が見える関係」「消費者の食べ支え・生産者の作り支え」をスローガンに大豆は2000年からそして小麦は2002年から、私たちの食卓には欠かせない主要農産物2つのトラストを進めてきました。特に小麦トラストは10年目の今年で終了となります。最後の小麦トラストへ皆様のご参加をお待ちしています。

■大豆トラスト■ 生豆(2kg)1500円送料別。

味噌加工(出来上がり約7kg)5500円送料込み。

■小麦トラスト■ 12月～翌年3月まで毎月1回製品を宅配、ファームレターの送付など。13,200円道内送料込み。

製品とは：パン…テーブルパン&菓子パン。麺…ラーメン、生パスタ、手延べ麺。

菓子類…焼き菓子、和菓子系などを4人家族設定で組合せしています。

小麦情報や農業情報を掲載した小麦通信を製品と一緒にお届けします。

★問い合わせ先 090-6266-4324事務局へ



東日本大震災の発生から4ヶ月が過ぎました。福島第1原発ではトラブルが続き、事故の収束の見通しは依然として立たず、陸、海、空への放射能汚染の被害の全容も今だまったくわからないままです。

今回「てんとう虫」では安川さん、内藤さんのお二人に関連の記事を書いていただきましたが、原発の被害を受けた現地の方たちの心情は想像に余りあ

り、いかばかりかと思えます。

人間のみにならず陸上の動植物、海に住む生物、生きとし生けるもの全てを汚染し、夥しい環境破壊をおこした今回の事故。その罪は重く、責任の一端は、原発の危険性をうすうす察しながらも声を上げる事をせず、あるいは見ぬふりをしてここに至らせた、私たちにもあるのではないのでしょうか。

次世代により良い社会を手渡すためにどんな決断をするのか、今、ひとりひとりがその判断を問われていると思います。

(事務局長 大熊 久美子)